

ラブロマンスはオフィスの外で

目次

ラブロマンスはオフィスの外で	5
「ア・イ・シ・テ・ル」と伝えたい	183
One Step Closer	235
—これからも貴方とともにいるために—	

ラブロマンスはオフィスの外で

プロローグ

「あっ」

結子は側溝の蓋のくぼみに踵を引っかけた。

「平らな道をまともに歩けないなんて、お前、どれだけ飲んだんだ？」

その場にしゃがみ込んでしまった結子を彼が呆れたように見下ろす。

「……すみません」

「ほら」

消え入りそうな声で謝る彼女に、差し出された手。

「え？ ああ」

「いいから、手を出せ」

どうしたらよいのか分からないといった表情で躊躇する結子の様子に、彼は半ば無理やり彼女の手を引いた。

「あ、ありがとうございます」

「こんなところで転がったりしたら、通行の妨げになるからな」

言葉こそぶつきらぼうだが、握られた彼の手は温かく、そして……優しくかった。

ここは都心の裏通り。

上司の結婚式で二次会で、調子づいた同僚たちに勧められるままにお酒を飲んでしまった結子は、酔いが回ってふわふわと雲の上を歩いている気分になった。そして気が付いてみれば、なぜか憧れの元上司、澤井に会場から連れ出され、彼と手を繋いで歩いているという信じられない状況にいる。「まだこの時間なら表通りまで出れば車が拾える。少し歩くが大丈夫か？」

「あ、はい。平気です」

そう言ったそばからふらつく彼女の手から、澤井が大きな紙袋を奪い取るうとする。それを見た結子は、慌てて彼の手を押さえた。

「かつ、係長。これ重いですからいいです。自分で持ちますから」

「だから俺が持つんだ。余計な心配は要らないから、お前は前を向いて真っ直ぐ歩くことだけに専念しろ。転ぶなよ……って言ってるそばから躓くのか、お前は」

道路のほんの少しの段差に足を取られてよろめく結子を、彼が呆れた表情で見ている。

「ほら、行くぞ」

「は、はい、すみません」

こんな調子で表通りまでの数十メートル、二人は手を繋いで歩いた。

雰囲気は恋人同士というよりも親に手を引かれる小さな子供みたいな感じだったが、それでも結

子にとっては夢のようなひとときだ。

入社以来ずっと憧れ続けた元上司の澤井。彼とこんな風に並んで歩く機会なんて、たぶん一生ないだろうと思っていたから。

「もう少し向こうまで歩けるか？ あそこまで行けばタクシーの乗り場がある」

彼が顎でしゃくつたのは道一本隔てた通りの反対側。見ればそちらには客待ちの空車のタクシーが数台、路肩に並んで停まっている。

だが結子はすぐに頷けなかった。

そこまで行けば確実にこの夢の時間は終わってしまう。それは避けられないことだと分かっているのに、今夜の彼女にはその切ない現実を素直に受け止められなかった。

もつと彼のそばに居たい。一晩でもいいから、彼と一緒に過ごすことができれば……

結子は突然自分の中に芽生えた、大それた願いに戸惑う。

好きな男性と夜を共にするという行為自体は知っていても、実践したことは一度もない。それどころか恋愛初心者の彼女は、それとなくその意思を仄めかし、相手を誘う術さえ持っていないのに。もしも今この気持ちを告げたとしたら、澤井は一体どんな顔をするだろうか。

いつもは注意深く表に出さないようにしている秘めた想いが、彼女の衝動をそそのかす。

「あの……」

結子が急に立ち止まり、少し潤んだ目で彼を見上げる。澤井はそんな彼女の様子に眉を顰めた。

「どうした？ 気分でも悪くなったのか？」

「いえ。そっちは何とか。ですがあの……係長にお願いがあるんです」

「何だ？」

「あ……」

何かを言いよどむ結子を澤井が訝しげに見た。

「何か俺に頼みたいことがあるんだろう？ いいから言ってみろ」

「……やっぱりいいです」

それきり俯いて黙り込む様子に、澤井が苛立たしそうな表情を浮かべた。

「いいから。遠慮せずに言え」

目を合わせようとしないう結子の顎を指先で押し上げて自分の方を向かせると、澤井は話すまで許さないと口を閉ざし、鋭い視線で彼女を見据えた。

こうなると何か言わないことにはこの状態から解放してはもらえないだろう。

平素の結子ならば咄嗟に思いついた言葉でその場を取り繕うこともできたかもしれない。だが、今夜の彼女はなぜかそうしなかつたのだ。

確かに少しアルコールが入り大胆になっていた、ということもあるかもしれない。しかしそれ以上に彼と二人きりでしかも手を繋いで歩いているというこの状況に酔っていたように思う。

たぶん今しか言えない。今夜を逃すと二度とこんなことを口にするチャンスは与えられない。そう感じた彼女は酒の勢いも手伝って、心の中でずっと温めていた思いを一気に吐き出した。

「あの、こ、今夜一晩、一晩だけ、私と一緒に過ごしてくださいませんか？」

——遂に言っちゃった。

その言葉を口にした途端、結子は両手で口を押さえると顔を真っ赤にして俯いた。勢いで言っ
てはみたものの、後から押し寄せるのは羞恥と後悔の大波小波。それが引くと今度
は心の中で一気に自己嫌悪の嵐だ。

何て身の程知らずなことをしてしまったのかと唇を噛むも、時すでに遅し。言っ
てしまったものはなかったことにできない。

えっと、こういうのを何て言うんだっただけ？　そうお盆にミルク……じゃなくて、
覆水盆に返らず？

なぜか日本語の諺と英語の諺を頭の中でちゃんぽんにするあたり、すでにかなり
思考能力が低下していることが窺えるが、必死の本人はそんなことにまで気が回らない。

だが、珍しく驚いた顔をした澤井はすぐにその表情を消すと、ふっと小さく笑った。
それを聞いた結子の体が小さく強張る。

だめ。お願いだから何も言わないで。

彼女は今、歩道の端に佇みながら、耳を塞ぎたい気持ちと戦っていた。

せつかく今まで幸せの余韻に包まれていたというのに、最後の別れ際にきつい言葉で拒絶されるのはあまりにも辛すぎる。それも相手はずっと自分が想い続けていた元上司。答えは初めからは分

かっているが、それでも彼の口から否定を、ましてや嘲りの言葉など絶対に聞きたくなかった。

だが、そんな彼女を見下ろす澤井が唇に薄い笑みを浮かべながら、冷やかな口調で言い放った
言葉は彼女が予想だにしないものだった。

「今夜一晩か……いいだろう。それでお前の気が済んだっただらな」

1

「異動って、私が業務グループに……ですか？」

まだ入社して一年にも満たない彼女が突然部長室に呼ばれ、異動の打診をされたのは、この夜か
ら遡ること二月前、二月初めのことだった。

上司である営業推進課長と平素はあまり接する機会のない営業部長に挟まれ、緊張しながら聞か
された驚きの人事。異動先にと提示された業務グループというのは、その名の通り営業関連の試算
や書類の作成といった事務的な処理を一手に引き受ける部署だ。

それまでの約一年間、結子が在籍していたのが営業推進課という取引先の新規開拓を主な仕事と
する、いわゆる外回りの営業だったことを考えると、いきなり畑違いの仕事をすることになる。

彼女の知っている範囲での業務グループというのは、完全な内勤でメンバーは女性ばかり四人。

そのうちの一人、リーダーである佐東係長が昨年末から産前産後休暇、引き続き育児休暇に入っ

いて、年が明けてからの人員がかなり手薄になっていることは聞かされていた。だが、まさかこの中途半端な時期に、しかも自分がその穴埋めに補填ほてんされることになることは夢にも思わなかったのだ。「年明けから派遣社員さんが一人入ったんだが、どうにも仕事が合わないといって、辞退してきたんだよ。それでもう一時しのぎの短期の派遣ではなく、業務グループの将来的な拡張を視野に入れて正社員を増員しようということになってね。その第一弾として、まずは同じ部内の君に白羽の矢が立ったというわけだ」

そういえばつい最近、業務グループのメンバーで自分と同期入社「メグちゃん」こと加藤萌かとうめいみが、新しく来た人に仕事を教えている間にどんどん自分のやる事が溜たまるから、このところずっと残業続きだつてばやっていたつて。

結子はぼんやりとそんなことを思い出しながら、同席した課長の説明を聞いていた。

あまりにも突然の話で、すぐに決断できるほど気持ちの整理がつかない。ただ、考えのまとまらない頭の中で「どうして自分が……」という疑問だけがぐるぐるとまわり続けている感じだった。

「あの……この異動の理由はやっぱり私の努力が足りなかったとか、そういうことでしょうか」
思い詰めたような表情でそう問いかける結子に、今まで黙つてやり取りを聞いていた部長の汐田しほが初めて口を開いた。

「いや、そういうことではない。この話の焦点は、努力というよりも資質と適性だね。君の部内での評価は決して悪くない。勤務態度は真面目だし、仕事に対する意欲も感じられる。ただ、現状ではそれを上手く活かさきれていないように思えるんだ。この先君に、今の職場で長く働いてもらう

ためにも、もっと自分に合った環境で存分に能力を発揮してほしい。そう思つて課長とも相談してこの話を進めたんだよ」

「そう、ですか」

まだ釈然としないものはあったが、それでも部長自らが結子にそういう評価を下しているのなら、それほど落胆を感じようとも部下としてその指示に従うしかないのもまた事実だ。

「あの……このお話、少し考えさせていただいてもよろしいでしょうか？」

そんなことをしても時間稼かせぎにしかならないことくらい自分でも分かっている。けれどももう少し、ぐちゃぐちゃになつた頭の中を整理する猶予が欲しかった。

「それは構わないよ。充分に検討してから結論を出してくれ」

そんな彼女の気持ちを少しは理解してくれたのか、汐田部長は鷹揚たかように頷いた。

「ありがとうございます」

「では、もう仕事に戻つていいよ。後の細かいことは課長や澤井係長と相談してくれるかな」

「はい……失礼いたします」

部長室に入った時には緊張のあまり慄おのいていた手が、今は別の意味で小刻みに震えている。廊下に出た後も、結子はまだ呆然とした様子で自分の手のひらを見つめていた。

「部長はああ言われたが、一両日中に返事をもらえるか？ 今後のことがあるから、早めに頼むよ」
そんな彼女に課長はこれでもかと言わんばかりのダメを押す。

「……分かりました」

「それじゃ、もう業務に戻ってくれ」

「はい。失礼します」

課長に一礼して回れ右をすると、彼女は足取りも重く廊下を戻っていく。その道すがら、頭の中をよぎるのは疑問と失望と、そしてほんの少しの諦めだ。

恐らく既にこのことは上では決定事項になっているのだろう。課長が言う「今後のこと」とは、現在彼女が担当しているユーザーの振り分けや来期の予算配分の変更等に違いはない。もうそこまで話が具体的に進んでいるのであれば、自分ごときが今さら異を唱えたところでそれが動くとは思えない。

自分の席に戻った結子は、虚ろな目で空席の目立つ室内を見回した。それもそのはず、本来ならばとつくの昔に自分も外回りに出掛けているはずだった。むしろこんな時間に営業がオフィスにいる方がおかしいのだ。

「はあ……」

ため息交じりに机に肘をつき、両手で頭を抱える。

いきなりの異動話は彼女にかなり大きなショックを与えた。もう自分はここでは必要とされていないのだということを暗に示されて、正直なところかなりへこんだ。

後から知った話では、いくら同じ部署内での異動でも、配属一年未満での配置転換は、余程のことでもない限りあまり例がないらしい。名目こそ部内の業務力強化のための転属となっているが、

先ほどの課長の態度からすると、営業としての自分が上から見切りをつけられたことは明白だった。

「自分では頑張ってるつもりだったんだけどなあ」

今日は同席していなかった直属の上司である澤井も、結子の限界を見極めた上で異動を了承したのかと思うとやりきれない思いが込み上げてくる。

実は、彼女は以前からひそかに澤井に憧れを抱いていた。プライベートで隣に並べないのなら、せめて仕事では彼に認められたい。そう思って自分なりに努力もしてきたつもりだ。なのにそんなささやかな願いさえも叶えることができなかった自分の非力さと不甲斐なさが、彼女の心を重くした。

結局結子は翌日にはその話を承諾し、それから数日後、正式な異動の内示が出た。他部署への通知はまだ先だが、部内でのそれは同僚たちの口伝えですぐ他にも知れ渡ることになる。

結子の指導員だった平岩は、彼女が営業職を外されたことを知り本人以上にショックを受けたらしく、課長やその上の部長にまで撤回を直訴してくれたようだが、宮仕えの悲しき定め、一度会社が決めた人事はそう簡単に覆るものではない。

結局、その後社内でも正式な通達が出て、三月一日付で結子の異動は決定事項となった。

「ほら、結子、元気出して。業務グループだって悪くないよ。みんな優しいから居心地いいし、何

てつたつて私もいるんだからね。一緒に頑張ろうよ」

部内で内々に異動が発表された日の夜、会社のすぐ近くにあるちょっとオヤジくさい雰囲気の居酒屋で、これまたサラリーマンのつまみの定番メニュー、ホツケの身をほぐしながらそう慰めてくれるのは、新しい配属先で机を並べることになる同僚の加藤萌だ。

同じ年の彼女とは入社以来の付き合いで、新人社員の基礎研修中に同じグループだったことから仲良くなった。ちょうどこの年に本社営業部に配属された女性社員は自分と萌の二人だけだったこともあり、今までもいろいろある度に互いを誘い出しては愚痴を言いあつたりもしてきた。会社の中では唯一とも言える、気の置けない同期の友人だ。

こんな時、いつもなら結子が萌を誘って鬱積した思いを吐き出す場面だが、さすがに今回は内容が内容だけにちよつと言い出し辛かった。それを察した萌が気を回して自分をここに誘ってくれたのだ。

「うん、ありがとうメグちゃん。分かっている、分かっているんだけどね。まだ自分の中では納得してないっていうか、頭の中の切り替えができないっていうか。それにこんなことになってしまつて、何だか……平岩先輩に顔向けできなくて」

結子は汗をかいて周りに水滴をつけたグラスを額に当てて、「ふう」と大きなため息をつく。もはや悔しいとか、悲しいとかいった感情はないものの、突然わが身に降りかかったことがどうしても彼女の中で割り切れないものとして残ってしまう。

「私のこの一年間つて、一体何だったんだろうなあつて思うと急に虚しくなっちゃつてさ」

確かに自分是要領が悪く、外回りに向いていないかもしれない。それでも配属されたからには何とか仕事に馴染もうと思ひ、慣れない飛び込み営業だつてやつてきた。はつたりの利かない自分を鼓舞して一生懸命頑張つてきたというのに、結局はこんな形であつさり切り捨てられてしまふんて。

「やっぱり社会人は厳しいなあ。努力より結果が大事つてことか」

口に出すとますます惨めになり、不甲斐ない自分に嫌気がさす。

特に今までは自分と自分をフォローしてくれていた、同じグループの先輩であり指導員でもあつた平岩に対しては申し訳ない思いで一杯だ。いろいろと根気よく付き合つてもらつたし、失敗をした時には何度も助けてもらったというのに、結局仕事を仕込んだ後輩が使い物にならなかつたなんてあまりにも情けなさすぎて涙が出そうだった。

「そっか、そういえば平岩さん、結子の指導員だつたんだよね」

「……うん」

指導員というのは、入社したての新人が仕事を学ぶ時に教官のような役割をする社員だ。

この会社は全社的に指導員方式を導入しており、新入社員たちは入社してから一斉に行われる基礎研修後の一定期間、同じ部署の誰かの下にアシスタントとしてつき、仕事の内容や進め方を実践的に学ぶシステムになっている。ちょうど十ヶ月ほど前、配属された営業推進課で彼女の担当になつたのが、入社六年目の平岩という男性社員だった。

入社したての結子に社会人の厳しさを説き、営業とは何たるかを一から教えてくれたのはこの平

岩だ。思い返せば独り立ちして最初の契約を取れた時、真っ先にお祝いをしてくれたのも、ミスをして客先に謝りに行った際に並んで一緒に頭を下げてくれたのも彼だった。

だから結子は彼を社会人の先輩として心から慕っていたし、平岩もそんな彼女を後輩として可愛がってくれた。

しかし平岩のそばにいと、良い事ばかりが引き寄せられるというわけではない。その最たるものが同僚の女性たちからのやつかみだった。

ハンサムで人当たりが良く、その上独身の平岩は、当然女性社員の間でも人気が高い。仕事で、彼と一緒にいる時間が長いというだけで知らぬ間に他の部署の女性たちから不興を買ってしまった彼女は、しばしば身に覚えのない理不尽な言いがかりや嫌がらせを受けた。

特に女子トイレとロッカールームは結子にとつて鬼門といつても過言ではないくらいで、何度も平岩鬘肩のお姉さまたちにつかまってはネチネチと嫌味を聞かされたものだ。そのお陰で随分打たれ強くなったという自覚があるくらい、それはそれは酷い言葉を投げつけられたこともある。

それでも彼の下で仕事を覚える機会が与えられたことは、自分にとつて最高の幸運だった、と結子はずっと思っていた。

「そうだねえ。平岩さん、過保護なくらい結子のこと気に掛けているもんね。でも今は結婚式の準備とかでそれどころじゃないから、そんなに気に病まなくても大丈夫だよ、きつと」

萌の言うように、平岩は四月に結婚が決まっている。相手は同じ会社に勤める同僚で、六嶋早妃

子という女性だ。目の前にいる萌の直属の上司にあたり、平岩よりも五つ年上の、仕事のできるバリキヤリだ。

もともと入社した当時は今の結子と同じように営業で外回りをしていたという彼女だが、現在は数年前に営業部内に新設された業務グループの中核を担っていて、近いうちに育児休暇中のグループリーダーの後任として係長に昇進するのではないかと噂ばらの噂だ。

さっぱりした性格で情に厚い姉御肌。その上仕事では口八丁手八丁な彼女のことを「お局」などと陰で悪く言う人もいるが、結子は早妃子が嫌いではなく、むしろ、あの卓越した実務処理能力とポイントを押さえた的確な手腕は尊敬に値すると思っている。誰に対しても臆することなく堂々と自分の主張を通し、それに見合った仕事を彼女のエネルギーシユな姿は、働く女性ならば誰もが憧れを抱くというものだろう。

それに早妃子は決して人のことを貶めない。自分にできるからといって他人にも上から目線で同じことを強要する輩が多い営業部の中で、彼女は男女を問わず常に努力する者の味方だ。もちろん仕事に関して手抜きをすることは絶対に許さないし、何度も同じ失敗をする者には手厳しくて容赦がないが、それでも彼女を慕う人は多い。人をまとめるという観点からも、早妃子は営業部にとつてなくてはならない存在だった。

自分も将来は絶対に早妃子先輩のようなデキる女になるんだ。

いつもきらきら輝いている彼女を見る度にそう思って頑張ってきたのに、一年も経たないうちに

この為体なんて。

それも何の因果か、次の配属先は件の早妃子の下。希望して行つたのならばまだしも、使えない人材として放出された身を拾ってもらつたことを考えると、いささか肩身が狭かつた。

「郷原さんが言っていたけど、営推も来期に向けてちよつとしたテコ入れがあるみたいだつて」「テコ入れ?」

「うん。何でも一度グループを全部ばらばらにして、再編成するかもしれないとか何とか言つた。郷原さんも何か急にバタバタし始めちゃつて、このところ土日も関係なく仕事に出ているし帰りが遅くて別々になるから、ゆっくり話をするチャンスもないんだよ」

萌の恋人である郷原は営業推進課で結子と同じグループに所属している。彼が忙しくなつた理由の一端は自分の担当先が彼にも振り替えられるせいかもしれない。彼女の持つていた顧客など大した数ではないが、それでも今の状況で目一杯仕事を回している者もいることを考えると、自分が抜けることで同僚たちに余分な負担を押し付けてしまうような罪悪感を覚えた。

そんな彼女の忸怩たる思いを知らない萌は、お気楽な様子で飲み干したレモンサワーの底に残る氷を取ろうと、大きく口を開けてグラスを傾けている。

「その上、このところずっとそつちの係長のご機嫌が超斜めだつていうじゃない? ウチなんかはそうでもないけどそばで付き合わされる人たちは大変だよねえ」

ごりごりと良い音を立てて氷をかみ砕いている萌の口から飛び出した名前に、結子は思わずどきつとする。

萌が言うところの係長、澤井良平は、結子がいる営業推進課第二グループのリーダーだ。彼が率いるグループは総勢六名で、そのメンバーの中には若手のホープと呼び声が高い平岩や、同じくやり手で目の前にいる萌の恋人でもある郷原などが名を連ねる。昨年入社したばかりの結子はもちろん一番下っ端だった。

確かに最近何かにつけて澤井が昔だつて居るのは結子も感じていた。もともと彼はにこやかで愛想の良いタイプではないが、今週に入つてからは特にむつつりと黙り込んで何事かを考えていることが増えたように思う。お陰で彼のデスクの周囲は真冬のシベリア並みの強さの目に見えない寒気団が流れ込んでいて、部下たちは印鑑ひとつ貰いに行くのも遭難覚悟の命がけ? といったひどい様相を呈しているのだ。

「私が今回のことで澤井係長にも迷惑かけちゃつたからかな。彼、グループの責任者だし」
沈んだ声で呟く彼女に、萌が何かを思い出したように手を打った。

「そういえば、何か結子の異動つて澤井さんの頭越しで話が進んでいたみたいだね。ほとんど決まつてから一方的に上から言い渡されたつて本当?」

「えっ? そうなの?」

「そうなのつて……結子も知らなかつたんだ」

結子は大きく頷いた。通常でも自分に関する噂は耳に入りにくい。ましてや今回のようにあまり良い話ではない場合、本人に伝わらないよう周囲が気を使つてくれたのかもしれない。

「それでさ、澤井係長、部下の補充は一切いらぬ、意地でもこのままの人数で回していくみたい

なこと言って、部長や課長の前で啖呵切ったんだって。彼、冷たく激昂したらしいよ。こわっ」

内緒の話だけど、と萌が指を唇に当てる。

「冷たく激昂って、何それ？」

「営業と営業の部課長サンたち相手に、そりゃもう、とてつもない冷気振りまきながら静かに怒り狂って、理詰めでこの経緯を追及したそうな」

「……何か想像するのも怖い」

「でしょお？ その現場を実際に見たわけじゃないから、あくまでも噂だけだね」

澤井の冷静で物事に動じない性格は、部内どころか社内でもかなり有名だが、かといって何があってもまったく怒らないというわけではない。確かにいつも何か不手際が発覚してもさらりと短く注意をするくらいで、部下に対して頭ごなしに叱りつけたり、いつまでもネチネチ小言を言うようなタイプではないが、ひとたび本気で怒りのスイッチが入ると一瞬で周りの空気が凍りつくほどの危険なオーラを発する。

結子も最初にその現場を目撃した時には驚いて震えあがったものだ。

あれは、彼女が営業推進課に配属されてしばらくした頃、彼の部下で結子の同僚の一人が客先でトラブルを起こした時のことだ。すぐに会社に報告すれば敏速に処理できたのに、それを彼が一人で抱え込んでしまったがために対応が遅れ、事が大きくなってしまったことがあった。

その時澤井は部下の失態自体よりも、報告の遅れを重視し、その理由を彼に問いただしていた。

「なぜすぐに相談しなかった？ 業者まで丸め込んで、すべて自力で解決できるとでも思っていた

のか？」

「しかし、相手側と業者が……」

それまで比較的静かに彼の言い分に耳を傾けていた澤井が、その言葉が出た途端に一瞬で声のトーンを変えた。

「自分の不手際を認めず責任を転嫁するな。第一これだけの時間を無駄にしなければ他にも手が打てたはずだ。その間に自分が何をしていたのか、理路整然と釈明できるのか？」

口調は決して激しくない、だが低くて平坦だからこそより冷ややかに聞こえる。

何せ近くで聞いていただけの結子でさえ、室温が一気に十度くらいは下がったように感じたほどだ。彼らの周りにはビリビリした緊張感が漂い、叱責を受けていた部下は雰囲気圧されて言葉に詰まる。最後の頃の彼はもう涙目だった。

この、世にも恐ろしい怒りのオーラの瞬間冷却効果はまさにブリザード級の威力があり、その容赦ない直撃を受けた人間は上司であれ部下であれ、震え上がること必至と言われている。

——あの冷徹な表情で、びしっときついこと言われたら、そりゃ簡単には立ち直れないよね。

しかしそんな彼の冷たさも、傍から見れば仕事のできる男のクールさと都合よく解釈されるらしい。それに見た目の格好良さも加わり、内情を知らない他の部署にいる女性社員たちにはわりと……いや、はつきり言って驚くほど受けがいい。

グループ内でも長身の、平岩や郷原といった一八〇センチ超クラスの人たちと並んでも見劣りしないだけの立っ端はあるし、肩幅があるのに細身なのでスーツ姿が様になる。短めの髪をいつもき

ちんと梳かし、ぱりつとしたシャツを着て、センスの良いネクタイをしめ、ぴかぴかに磨かれた靴を履いている澤井は、まさにメンズ雑誌の正統派モデル仕様。これに愛用のツープォイントのメガネを掛ければ、向かうところ敵なしの敏腕ビジネスマンの見本のような感じになる。

これで実際に仕事もできるのだから、モテて当たり前だ。ただ、彼と付き合う上で一つだけ難があるとすれば、恐らくそれは相手の女性への態度があまりにも冷たく素っ気ないことだろう。

結子が入社してからも、何度となく彼に恋人ができたらしいという噂を耳にした。しかし、なぜかそれは数週間、よくもって数ヶ月で破局するか自然消滅してしまふ。結局、プライベートより仕事優先、その上あまり感情を表に出さず、誰にでも同じように接する澤井の態度が、彼を独占したい恋人には段々我慢できなくなってくるものらしい。

特にルックスに惹かれて近づいた女性たちは、あまりにも見た目通りの、クール過ぎて取っ付き難い彼の性格に戸惑い、幻滅することがほとんどのようだった。自分から言い寄っておいて何て身勝手なことを、と言えなくもないが、結子には彼女たちの気持ちは分かるような気がする。とらえどころのない冷ややかさと、時折見せる懐の深さ。すぐそばでその両方を見せられると、部下である彼女でさえ困惑し、澤井が何を考えているのか分からなくなるのだから、恋人ならば尚更だろう。だから係長は「観賞用」なんて言われちゃうんだよ。

結子は心の中でぼつりと呟いた。

「ああいう格好いいタイプは飾っておくにはもってこいだけど、一緒にいるのは大変そう。遠くか

ら見て『あらいケメン』って目の保養にするくらいがちょうどいいんじゃない？」

確か入社してすぐの仲間内の飲み会で、そう言ったのは同期の女の子の一人だったと思う。

その時は結子も同意した。

十歳も年上の、出来過ぎる上司なんて世界が違い過ぎて絶対に恋愛の対象にはならないと、本気でそう信じていた。

まさかその後、彼を相手に自分が恋をするなんて夢にも思わずに。

2

結子から見た上司としての澤井は、他人に見えるところで部下に手を貸してくれるようなタイプではなかった。多分そういったフォローをするのは、もつと彼女の近くにいて直接指導をする立場にある平岩の領分だと弁えていたのと思う。

だが、彼が部下となった自分のことをそれとなく気に掛けてくれていることは常に感じていた。

あれはいつのことだったか、まだ結子独り立ちする前、平岩の下について仕事を学んでいた時のことだ。

その日、終業後の遅い時間まで彼女は会社に残って翌日の資料を作っていた。

平岩は取引先との接待で早々と会社を出ており、同じ部の同僚たちも時間を追うごとに一人、ま

た一人と家路につく。そうして夜の九時を過ぎた頃には、営業推進課のオフィスに残っているのは、結子と澤井だけになっていた。

「出水、まだ終わりそうにないのか？」

自分のデスクを片づけた澤井が、帰り支度をして彼女に近づいてきた。

近寄りたくていつも少し下がった位置から澤井を見ていた結子は、この状況に内心びくびくしていた。夜遅い時間にただっ広いオフィスに一人残されるのも怖かったが、日頃から部下に厳しい彼と二人きりというのもまた別の意味で恐ろしい気がする。

「あ、はい。もう少しかかりそうです。係長、お先にどうぞ。戸締りは私がして、鍵は守衛室に預けておきますから」

彼女の答えを聞いた澤井が自分の腕時計を見る。

「あどどのくらいで片付きそうか？」

「そうですね。一時間もあれば何とか」

「そうか」

彼はそれだけ言うと、カバンと上着を机の上に置いてどこかに行ってしまった。

あれ、係長、トイレかな？

そんなことを思いながら、結子は目の前のデータに意識を戻し、入力続ける。

強がってああは言ったものの、まだあどどのくらいかかるのか皆目見当もつかない。いつもだと平岩の手が空いた時に彼女の分も手伝ってくれるからもつと早く終われるのだが、今日は全部一人

でやってしまわなければならなかった。平岩は帰りしなに、できるところまでで止めて途中で帰っていいと言ってくれたが、彼女は今夜中にこれだけは済ませたいと半ば意地になって続いていた。

「はあ、やっぱり甘やかされていたんだな、私って」

一通りのことは自分でもできるようなったと思込んでいた結子は、改めて知るわが身のところにうんざりしていた。やってもやっても仕事は減らず、時間ばかりが過ぎていく。

もつとさつさと仕事をこなせるようにならなければ、こんな調子ではいつまでも一人前と認めてもらえそうになじ。

彼女の口から、今夜もう何度目か分からないため息がもれる。

長い時間同じ姿勢で作業をしていたせいかわ、目が疲れて首筋や肩がガチガチに凝っているが、今はそんな不平を言う暇も惜しい。とにかくこれだけは済ませておかなければ、明日の朝一番で平岩にチェックを入れてもらうことができないのだ。

「ほら、一息つけよ」

しかめっ面で、モニターに顔をくっ付けるようにしてアルファベットや数字とにらめっこしていた結子は、目の前に突然現れたカップに驚いた。差し出したのは澤井係長。彼の手の中で、ほんわかと甘い香りのココアが湯気を立てている。

「あ、す、すみません。ありがとうございます」

結子がそれを受け取ると、彼は自分の紙コップを持って席に戻っていく。漂ってくる香りで彼が手にしているのはホットコーヒーだと分かった。

あれ？ 何で係長、私が残業する時にはココアを飲むって知っているんだろう。

いつもはコーヒー党の結子だが、こんな時は好んでココアをそばに置いていた。疲れた時には甘いものが美味しいし、小腹も満たされる。それに、いくら好きでもさすがに空腹時にコーヒーをがぶ飲みするのは胃に負担がかかるからだ。

「あの、係長？ まだお帰りにならないんですか？」

澤井はキャスターを軋ませて椅子に座ると、持っていたカップから一口啜った。

「部下を、それも女性社員を一人残して帰れるわけないだろうが。終わるまで付き合う」

「え、でもまだちよつと……いえ、かなりかかりそうなんですが」

「構わん。終電まで付き合ってるから、作業を進める。それから、終わったところからデータをとつちに回せ」

結子の困惑した様子を気にも留めず、彼は再度パソコンを立ち上げると軽やかにキーボードを叩き始める。

いいのかなあ、係長まで付き合わせちゃって。

両手で包み持った温かなココアがカップの中で揺れるのを見つめながら結子は思った。一人きりの残業などしたことがない彼女には、誰かが一緒にいてくれるだけでも心強いのだが、それが澤井となると反対に緊張してしまいそうだ。

「ほら、ぼんやりせずに手を動かせ。時間が惜しい」

「す、すみません」

結子は弾かれたようにキーボードに向き直ると、慌ててキーを叩き始める。

こちらを見てもないのに、なぜ動きが止まっているのが分かるのか不思議だったが、とにかく彼女は必死で目の前にある資料を片づけていった。

結局二人が会社を出たのは十時半を少し回ってからのことだった。

「結構時間がかかったな」

「……すみません」

身を竦ませた結子が、腕時計を見ながら呟く澤井の半歩後ろをついて歩く。斜め下から見上げる彼は、疲れた様子一つ見えない。さすがにこの時間なので、シャツの襟元を緩め、ネクタイを外してはいるけれど。

「これからは一人でやらなくてはならないことがどんどん増えてくる。時間が経てば慣れて手際もよくなるだろうが、しばらくはこんな状態が続くだろうな」

「覚悟はしています」

そう言った彼女を澤井が立ち止まって振り返る。その動きに一瞬反応が遅れた結子も慌てて足を止めたが、すでにその時目の前には彼のスーツが迫っていた。

うわあ、鼻先十五センチの距離まで大接近？

どぎまぎしながら澤井を見上げると、彼もまた自分を見下ろしていた。

ぱっちり目が合ってしまった気まずさに少し視線を下げた彼女は、彼の顎に薄らと髭が浮いてい

るのを見つけてその何とも言えない生々しさに思わずぐくりと唾をのみ込んだ。

ち、近すぎです！係長！

彼の息が自分の額にかかっているのを感じた結子だが、体が固まったように動けない。どういわけか、澤井もまた後ろに下がろうとはしなかった。

会話が途切れたまま、向かい合った二人はしばらくその場に立ち尽くしていた。

こんな近くに近くにいるというのに互いに触れることもなく、結子は俯き、澤井はそんな彼女をじっと見つめている。

その微妙な沈黙を先に破ったのは澤井の方だった。

「俺も出来る限りフオローはするが、周囲の助けにも限界がある。しつかり独り立ちしてくれよ」

「は、はい、頑張ります」

そのやり取りで一気に呪縛が解けたかのように二人は地下鉄の駅へ向かって歩き始め、そのまま改札で別れた。しかし、地下鉄に乗ってからも、彼女は自分でもよく分からない感情を持て余していた。

差し入れのホットココアといい、先ほどの会話といい、今夜の彼からはただ厳しいだけでなく、部下を思いやる上司の気持ち伝わってきた。今まで彼女が澤井に対して抱いていた冷徹なイメージとは異なる彼の態度に戸惑いを覚えたのだ。

一体あれは何だったのかなあ。

ドアのそばに立った結子の、何気なく自分の前髪に触れた手が止まる。そこにはまだ、澤井の息

が自分の髪を揺らしたあの感触が残っているようだった。

そして翌朝。

いつもと同じ時刻に会社した彼女は、すでに平岩が来ているのを見つけると慌てて彼のもとに行った。

「平岩さん、おはようございます。あの、昨日の資料なんですけど」

「ああ、出水、おはよう。それならもうチェックできていますよ。というより、昨夜のうちに係長が全部最終チェックまで入れてくれていたから、何ヶ所か修正してから打ち出して」

「えっ？」

「昨日は遅くまでやってたんだ。お疲れさん。澤井さんがチェックしているってことは、係長も一緒だった？」

「あ、はい。ずっと残って下さっていました。監視役で」

それを聞いた平岩はにやりと笑うと、彼女にウインクした。

「係長は俺と違って入力を手伝ってはくれなかっただろうけど、ちゃんと修正箇所のピックアップはしてあったよ」

彼は机の上に広げてあった資料の、マーカーでチェックしてある箇所を指さした。

「ほら、ここ。入力ミスだ。他にもいくつか、分かりやすくチェックしてあるから、そこを直すようにね」

資料を手渡された結子は、結構な数のピンク色のラインを見て目を丸くした。

「あの、これって係長が？」

「そうみたいだな。朝来たら俺のデスクに置かれていたんだ。係長、今日は出張だろう？ 早い時間に一度会社に立ち寄ってから出たんじゃないか？」

予定ボードを見ると、澤井は支店会議で終日出張となっていた。

ということは、翌朝早く家を出ないといけないと分かっていたのに、あの時間まで自分に付き合ってくれたのだ。

係長に悪いことしちゃった。

結子は幾分申し訳ない気持ちになりながら、自分の席に戻るとパソコンを立ち上げた。

まだ始業まで時間に余裕があったが、少しでも手元の仕事を減らしておきたかったからだ。

昨夜作業をしたファイルを開き、データを読み込んでいると、ふと澤井に言われた言葉を思い出した。

『じっくり独り立ちしてくれよ』

まだ仕事の遅い結子に、当然のこととして全部一人でやらせようとする澤井の対応はある意味冷たいと言えるかもしれない。しかし、自分が手を貸さず彼女に任せれば、あとでよけいに時間も手間もかかることを承知の上でそうしているのならば、それは彼の深慮の表れではないだろうか。

自力でやり遂げることの大切さや難しさを、身をもって教え込む。これは上司としての彼の励ましと優しさなのかもしれない。

今後は昨夜のようなことも普通になってくるのだろう。今まで平岩たちの庇護の下、苦勞らしい苦勞もせずにいたせいで、自分ではもう一人前の営業ウーマンとしてやっていけると思い込んでいた。とんだ思いあがりだ。

そのことにさりげなく気づかせてくれた澤井はやはり平岩同様、結子にとって尊敬すべき上司だったのだ。

そんな彼女が自分の気持ちの変化を自覚したのは、昨年初めの頃のことだった。

それより少し前、社内に平岩と早妃子が結婚するらしいという噂が流れ、営業部内は一時騒然となった。

早妃子は三十路になっても独身を通して来た、バリバリのキャリアウーマン。対する平岩は営業推進課のエースで、若手の中では同期の郷原の向こうを張る出世頭として将来を囑望され、社内的女性陣の熱い視線を一身に集める存在という異色の取り合わせだったからだ。一見、仕事ができること以外共通点がなさそうな二人だが、カミングアウトしてからのあつあつぶりに周囲は当てられっぱなしだ。

もちろんそれを知った時、結子も心からこの二人の婚約を祝福した。

そしてこの出来事は彼女にもまた、思わぬ福音をもたらした。

一時よりも減ったとはいえ、まだ続いていた彼女への嫌がらせが、その時を境にぱったりと鳴り

を潜めたのだ。

平岩が特定のパートナーを、それも婚約という形で宣言したことの影響は大きかった。というのもそれは即ち結子が嫉妬の対象から完全に外れたことを意味するからだ。もともとそんなことは微塵も考えていなかった彼女だが、一緒にいるというだけでやっかまれることも多かつただけに、内心ほっとしたのは確かだった。

「平岩さん、お疲れ様です。六嶋主任、ご婚約おめでとうございます」

終業後、噂の二人と一緒に会社を出ようとしている場面に出くわした結子は、話を聞いてからずっと早妃子にも言いたかった、お祝いの言葉を口にした。

「ありがとう」

少し恥ずかしそうに答えてくれた早妃子と、そんな彼女を見て微笑む平岩の様子を、彼女はうっとり見つめた。

まさに理想的なカップルの図だなあ。

結子は心の中でうんうんと、大きく頷いた。

女性社員たちの伏魔殿、ロッカールームで「何で彼があんな年増と」とか「年齢的にも役職的にも釣り合い」とか散々言われているのを耳にする結子だが、二人が一緒にいるとこれ以上なくらしいじっくりくると思う。

確かに今は早妃子の方が役職は上だし、年齢も五つほど年嵩だが、それらを差し引いてもお似合

いのカップルだと思う。二人が互いに想いあっていることは見ていて疑う余地はなく、そんな相手を見つけることのできた彼らが羨ましくて仕方がなかった。

「平岩、今帰りか？」

そんな結子の思いを遮るように、背後から声が聞こえた。反射的に振り返ると、そこにはこの時間になってやっと営業先から戻って来たらしい、澤井の姿があった。

「はい、澤井係長、お先に失礼します」

「ああ、気を付けて帰れよ」

「澤井君、お疲れ様。お先に」

「六嶋もお疲れさん。ここからはプライベートタイムだからって、あんまり平岩をいじめるなよ」

「もう、失礼ね。私がいじめられているとは思わないわけ？」

「君のことだからそんなことはありえないさ」

澤井の軽口に頬を膨らませた早妃子が何だかかわいく見える。

「やだよ。行こう、平岩君。こんなのと一緒にいたら、性格悪いのがうつっちゃう」

「まあ性格が悪いっていうのは否定しないが、それでも君ほどじゃないよ」

「なんですって？」

そのやり取りを聞いていた結子は思わずぷつと噴き出すが、ちらりとこちらに目をやる澤井の表情を見て慌てて両手で自分の口を押さえた。

「す、すみません」

「いいのいいの。もつとズバツとはつきり言つてやつて構わないわよ。しかし、澤井君、あなた本
当に表情が動かないわね。顔に筋肉があるの？ やっぱり前世は鉄仮面かカオナシよね」

「カオナシって、俺の前世はジブリキャラか？」

「間違つてもトトロじゃないわよ。あんな愛嬌はないから」

まだまだ二人の掛け合いは続いていたが、初めてその様子を目の当たりにした結子は啞然とした。
信じられないことに、あの澤井係長が軽口をたたいている。それも六嶋女史を相手に。

平岩はもう慣れつこといわんばかりにそんな二人を笑いながら見ていて、自分は話に加わりとうと
はしない。

「驚いただろう？ 澤井係長って普段はこんなんだぜ」

そばで口をあんぐり開けている結子の耳元で、平岩がおかしそうに囁いた。

「もう、平岩君、こんなイケズなオッサン、放つておいて帰るわよ」

言いたいことは言い尽くしたのか、早妃子はさっさと澤井に背を向け平岩の方を見た。

「オッサンで悪かったな。自分も同じ年のくせに」

「女性の年をあげつらうなんて、失礼なやつ」

そう言いながらわざと怒つた顔を作つた早妃子が、後ろ向きのまま当てずっぽうで澤井のお腹あ
たりに軽く肘鉄を食らわせる。

「うっ……折れた。骨が」

「はあん、澤井君のお腹には骨があるのね。心臓には毛が生えているし。すごいなあ、あなたつて。

本当に人間？」

「一応そのようだ、なあ、出水」

終わりそうにない応酬をぼんやり眺めていた結子は突然話を振られて慌てた。

「えっ、そ、そうなんですか？」

それを聞いた早妃子が澤井の方を向いて意地悪くにんまりと笑う。

「ほれみなさい。出水さんだつて疑つているんじゃない？」

「いえ、決してそんな意味では」

「出水、お前……」

慌てて否定したもののその後のフォローの言葉が見つからない彼女を澤井がじろりと睨む。

「後で顔を貸せ。ちよつと話がある」

「ひええ、すつ、すみません澤井係長。どうかお気を鎮めてくださーい」

ひとしきりそんなやり取りをした後、平岩と早妃子は仲良く連れ立って帰っていった。二人を見
送つた後、その場に残つた結子と澤井だが、なぜか先ほどとは打つて変わつて微妙に空気が重い。

「あの、ところで澤井係長、お話つて」

何を言われるのかと恐る恐る訊ねたが、澤井は疲れた顔で「言葉のあやだ。お前も早く帰れよ」
と言つたきり、くるりと彼女に背を向けてオフィスの方に向かつて歩き出す。その疲れの滲む後ろ
姿を見ていた結子の中にある疑問が湧き上がった。

もしかして、澤井係長つて六嶋主任のことが好きだったのかな。

確か同僚の誰かに聞いた話では、澤井と早妃子は入社年度が同じで、配属先も最初から同じ営業部だった。通常、総合職の社員は係長に昇進する前に最低一回は転勤を経験するのが慣例なのだそうだが、この二人は例外的に、入社から現在までずっと本社営業部に留まっている。

六嶋の場合、今のところ主任であるし、業務グループが本社にしかないの動きようがないのは分かるが、澤井のようにつつと営業畑にいながら管内にも管外にも異動にならないのは珍しいことらしい。

そのせいか、二人は随分と仲が良いみたいで、婚約者である平岩が目の前にいるのに、早妃子は澤井とばかり話をしていた。

先ほどのやり取りを思い出した結子は、自分の中に湧き上がったもやもやした気持ちに気付いてはっとした。

まさか私、澤井係長と親しい早妃子先輩に嫉妬してる？

そんなばかな、と慌てて否定してみたものの、どうしてもその嫌な感覚を捨てきれなかった。

昔、高校時代に片思いしていた人に恋人ができたと聞き、ついその相手の女の子の粗を探してしまったことがあったが、今の気持ちはそれとよく似ている。好きな人のそばにすることができる幸せな人を妬んでしまう醜い感情と、それを引き起こす原因が澤井であること。その両方の事実を突きつけられた結子は愕然とした。

どうしよう。私、澤井係長のことが……好きなんだ。

一度その気持ちに気づいてしまうと、今まで気にもしなかったことがどうしても目に入ってくる。知らず知らずのうちに澤井の姿を目で追っていた結子は、ある時決定的な場面を見てしまった。

その日の終業後、使われた湯呑みやコップの後片付けをしていた時のことだった。

彼女がいた給湯室からは目の前の休憩コーナーの入り口付近がよく見通せるのだが、そこで澤井が紙コップを手にしたまま佇んでいた。何をしているのかと彼の見ている方向に目をやると、その視線の先には今日も仲良く一緒に帰っていく平岩たちの姿があったのだ。

二人が見えなくなると澤井は小さく息を吐き、持っていた紙コップをぐしゃりと握りつぶしてゴミ箱に放り込んだ。

その表情には、いつものクールさは微塵もなく、今はもう誰もいなくなった廊下を見る目が切なそうに眇められていた。

ああ、やっぱりそうだったんだ。

それを見た結子は納得すると同時に落ち込んだ。彼の想い人が早妃子であるなら、いくら頑張ってみたと敵うはずがなかった。

たとえ早妃子が平岩の婚約者であっても、澤井が心の中で彼女を想うのは自由だし、そんな彼を自分の方に振り向かせることなんて絶対にできっこない。

所詮叶わぬ恋だったのだと自分を慰めてみても、会社で毎日澤井の姿を見ると、どうしても心が痛む。

それだけでなく、彼もまた、まるで浮かぬ顔をした結子の辛い思いを感じ取ったかのように、以前にも増してよそよそしく彼女に接するようになった。

タイミンズとして独り立ちする時期ではあったし、上司や先輩たちに頼ってばかりもいられないことは充分理解していたが、澤井に素っ気なくされるとそれだけで自分が見捨てられたような気になった。平岩は相変わらず優しくあったし、過分なほどのフォローもし続けてくれたから、これ以上他人に甘えてはいけないと分かっているのに、どこかでまだ澤井のアドバイスを、否、アドバイスされることで保てる彼との繋がりを欲しがってしまう自分が浅ましく思えた。

それから半年、相変わらず仕事も上手くいかず、成果が出せない日が続いた結子は更に気落ちしていた。自分でも日に日に覇気はきがなくなっているのはわかってはいたけれど、それを劇的に挽回するような出来事もなく、ひたすら目の前の予定をこなすだけで精一杯な日々。結果が伴わないという焦りに抗あがいながら、頑張れば頑張るほど空回りする自分。

疲れた心と体では何をやる気力も起こらず、ただ漫然とその日をやり過ごしていた彼女がそれを見透かされ、異動を言い渡されたのは当然のなりゆきだったのかもしれない。

「とにかく、大丈夫。ウチは女子ばつかりでみんな優しいし、冷氣振りまくような鬼上司もいないから。あ、でも忙しいよ。もうなあ〜くんにも考える時間がないくらい、あつという間に一日が過ぎちゃう」

結子がぼんやりしていた間もしゃべり続けていた萌は、いつの間にかお代わりしたグラスまで飲

み干していた。

「ちよっと、メグちゃん、飲み過ぎ。あんまりお酒強くないのに」

かく言う彼女もアルコールはさほど飲めないけれど、萌のお酒の弱さは別格だ。調子に乗って飲ませたら後が大変だと、郷原がよくこぼしている。

「このくらい平気、へいき、へーき。こんな時はお酒飲んでパーっと憂さ晴らししなきゃ。まだまだ飲んじやうよお。さ、結子も飲んで。明日は明日の風が吹くう」

薄めに作ってもらったチューハイをグラス二杯でもう目が据わりかけている萌を見て、結子は思わず声を上げて笑った。こんな風に落ち込んだ時、それに付き合ってくれる友達がいるってありがたい。

「メグちゃん、ありがとう」

「えっ何が？」

「ううん、まあいろいろと。一杯感謝している」

真顔で言う結子をきょとんとした顔で見ていた萌は、その意味を理解すると照れたように笑いながら彼女の背中をバシバシ叩いた。

「よく分からないけど、ま、いいや。さあ結子、今夜はガンガン盛り上がっちゃうよお」

こうしてチューハイ数杯で完全に出来上がったお手軽な下戸二人は、ほろ酔い気分分度店を後にした。その後、何とかタクシーを捕まえて萌のマンションまで戻って来たところまでは覚えていたが、そこから朝までの記憶がぶつ切り途切れている。どうやら自分のアパートまで帰りつくことが出来

なくて、萌のところに転がり込んで予定外のお泊りとなったらしいが、結子はその経緯をまったく覚えていない。それは萌も同じで、結局どちらがタクシー代を支払ったのかもあやふやだった。

二人が飲んだお酒の量は、普通ならばどうってことないと思われるアルコールレベルだが、彼女たちには十分すぎたらしく、翌朝目覚めた時には揃ってかなり酷い状態に陥っていた。

「ぐえっ、気持ちが悪いよお。何か胃がむかむかするう」

「私は二日酔い。頭がガンガンする」

起き上がれない二人は、朝からずつと部屋のラグの上に転がったまま唸っていた。今日が土曜日で本当によかった。でなければ今頃は二人とも、会社で頭痛や吐き気と戦いながら真つ青な顔をして机に向かわなければならぬところだ。

「でも、これでちよつとは嫌なことも忘れられそう？」

「えっ？」

驚いた顔をする結子に、ひんやりしたフローリングの床にほつぺたをくっ付けたままの萌がにっこりほほ笑んだ。

「だってさ、結子、ここんとこずつと、すんごい暗い顔してたんだよお。自分では分かんなかったかもしれないけど。その落ち込み、今回の配転のせいだけじゃないんでしょう？」

「……うん」

「やっぱりそっか。ねえ、結子。もしかして、好きな人でもいるの？」

凶星を突かれた結子は、咄嗟に何も答えられずその場に固まった。

「あ、もしかして、もしかする？ きゃく遂に結子にも春が来た？」

はしゃいで起き上がろうとした萌だったが、急に吐き気に襲われたらしく、呻きながら両手で口を押さえてその場に沈み込んだ。

「うえっ、中身が出てきそう」

「ちよつとメグちゃん大丈夫？」

「根性で我慢する。だってここで吐いたら後始末が大変だもん。でも、このことは郷原さんには内緒にしておいてね」

日頃から彼氏に「吐きそうになるまで飲むな」と口を酸っぱくして言われているらしい彼女は、えへへと笑ってウインクした。

「でもね、恋愛も良いきっかけだけさ、仕事の方も今までと違う環境になればまた気分も変わってくるし、運も上向いてくるかもしれないよ。配転は今までのことを全部リセットして、新しい可能性を探すチャンスなんだって思えばいいんだって」

「そ、そうかな……」

「うん、きつとそうだって。それよりねえねえ、結子の彼氏って誰よ？ 社内の人？ それともどこかで知り合った？」

「だから、彼氏なんかじゃなくて、こう、ちよつといいなあって思ってるだけ」
「もごもご口ごもる結子を見る萌の目が好奇心にきらきらと輝いている。」

「本当にいい？ 正直に言いなよ」

「言ってるって」

そう答えながら少々良心が咎めるが仕方がない。萌も彼のことをよく知っている以上はあまり迂闊なことも言えなかった。そんな結子のためらいを感じ取ったのか、少し眉を寄せた萌にヘッドロツクを掛けられそうになる。

「信じられないなあ。ほら、洗いざらいゲロしちまいな……ってダメだ、自分が先に吐いちゃいそう」
急に動いたせいで吐き気が込み上げたらしく、口を押さえて喘ぐ萌を横目に見ながら、結子は思わず嘔き出した。

「ほらもうおとなしく、気分が良くなるまで横になってなさいよ」

「うーん、残念だけど今日は諦めるか。でもそのうち、ちゃんとして聞かせてもらおうからね」

そう言っただけで沈んだ友人を見て結子は思う。

この何事にも前向きな友人にはいつも救われる。彼女は本当にありがたい存在だ。

「リセット、か……」

そう、これは神様がくれたチャンスなのかもしれない。

すべてに臆病になりかけた自分を奮い立たせ、失った自信を取り戻すための、そしてあの人への恋心を諦めるための……

3

こうして結子が部署を移り、ひと月余りが経った四月の初め、平岩と早妃子の結婚式と披露宴が執り行われた。

式の参列者は親族のみだったそうだが、その後に催された披露宴には幾人かの同僚たちと共に、現在新婦の部下となっている結子も招待されていた。

結子がいる七人掛けのテーブルは丸ごと一卓、会社関係者で占められていて、彼女の左横には郷原その隣に萌、汐田営業部長、業務グループの同僚である尾藤、営業推進課の課長の順に続き、結子の右横には澤井が座っている。

披露宴は新郎新婦の入場の後、主賓の挨拶、乾杯の音頭で始まり、会社の同僚や友人たちのスピーチや歌と滞りなく進んでいく。そして今はお色直して主役は揃って席を外しており、その間会場には二人の生い立ちから現在までを紹介するスライドが流されていた。

先に紹介された平岩に続き、スクリーンに早妃子の赤ちゃんの頃の写真が映し出される。七五三の写真から幼稚園の遠足、小学校の運動会、中学校の卒業式と司会のナレーションと共に移り変わる映像を、結子はぼんやりと眺めていた。

「女って、本当に変わるもんだなあ」

聞こえてきた呟つぶやきにそつと隣をうかがえば、澤井が感慨深げにスクリーンに見入っている。「お前もそうだったのか、出水？」

急に話を振られた結子は、こつそり彼を見ていたつもりだったのに、気づかれていたのかと、うろたえた。

「ど、どうでしょう？ 自分では子供の頃とあんまり変わらばえしなと思うんですが」

それを聞いた澤井はふつと笑みを漏らす。

「いや、この一年の間にお前は随分しなやかに変身したと思うけれどな」

「えっ？」

彼の言葉の真意を測りかねている間にスライドが終わり、司会者から新郎新婦の再登場が告げられる。一瞬場内がしんと静まり返り、それまで流れていた音楽が変わって一層照明が落とされたタイミングで入口の扉が開く。そこからキャンデルを持った二人が姿を現してスポットライトに浮かび上がるのを見た途端に、彼の表情がすつと冷めたものに変わった。

やっぱり複雑だよな。自分が好きな女性が他人のものになるのを、こんなところから見ているのって。

他人から見ればそれがクールな普段の顔に見えるのだろうが、約一年の間ずっとそばにいて、そのうち半年近く彼の一举一動を追いかけていた結子には、どうしてもその違いが分かってしまう。

澤井の横顔を隣でこつそりとうかがっていた結子は、心の中でため息をつきながら膝の上に置いた自分の手を見つめた。

職場環境が変わってひと月余り。

新しい仕事の方はまだ引き継ぎの段階だけれどまずまずの滑り出しだし、早妃子たち業務グループの同僚とも良い関係を築いていけそうだ。事前に萌に言われていたようにとにかく忙しく、気が付けばいつの間にか一日が終わっているということもしばしばだった。仕事に追われつつも毎日が充実していて余計なことを考える暇もないはずの彼女だが、一度自覚した恋心を諦めるのは思っていたほど簡単なことではなさそうだ。ふと気が付けば、いつも心のどこかで澤井の姿を探している自分がいる。

どんなに気持ち悪い、いつこい人間だったのかもしれないなあ。他に心を寄せる女性がいる彼が自分の方を向いてくれる可能性は皆無かもしれないが、それでも好きな人を想う気持ちを抑えることはできなかった。

私って案外諦めの悪い、しつこい人間だったのかもしれないなあ。

そんなことを思いながら隣に座る澤井の方をちらりとうかがうと、彼女の視線を感じたのか、彼もまたこちらを見た。

「どうかしたのか？」

「……いえ。お綺麗ですね、早妃子先輩」

まさか高砂の席を眺むようにしている本人に「どうしてそんなに不機嫌そうなのですか」などとストレートに問うこともできず、結子は曖昧あいまいな笑顔で言葉を濁にごした。

「そうだな。上手く化したものだ」

冗談とも本気とも分からない言葉にどう答えたらよいのか分からなかった結子は、正面を向いたまま顔を引き曇らせる。そんな彼女の耳元で、澤井が囁くのが聞こえた。

「お前、あいつらを見ていて辛くならないか？」
「えっ？」

言われた言葉の意味が理解できず、再度澤井の方を向くと、彼はまだうかがうような目で彼女を見ていた。

私が辛いつて、何で？

確かに、別の男性に嫁ぐ早妃子を見ているのは澤井にとっては苦しいことかもしれないが、どうして自分も同じように感じるなどと思われるのだろうか。

「いや、無理に答えなくてもいい」

彼はそう呟くとこちらから目を逸らし、主役たちのいる正面の席をじっと見据える。それきり二人の会話は途絶えた。しかし彼が口にした言葉は、結子の中で消化しきれないまま、謎として残った。

披露宴が終わると、少し時間を置いて今度は会社の同僚たちが企画した二次会がスタートした。

会場は挙式したホテルから車で十分とかならない場所にある、お洒落でこぢんまりとしたレストランで、当日の夜を貸し切りにしてあった。

披露宴に出た同僚や上司のほとんどはタクシーでそのまま会場を移動し、こちらにも出席している。もちろん、結子や萌、郷原たちもそうだ。

そしてなぜかここでも結子の隣には澤井が座っていた。それも相変わらず不機嫌そうな顔で。

何で係長、二次会まで来たんだろう。

結子は、早妃子たちの幸せそうな姿を見ているのが辛いはずの澤井がまだこの場に留まっているのが不思議だった。

二次会は有志の集まりで、営業部でも全員参加というわけではない。現にまだ生まれたばかりの子供さんが昨夜から熱を出しているという汐田部長は、披露宴が終わるとそのまま帰っていった。同僚兼上司としての義理を果たした澤井も当然そう思うと思っていたのに、彼は当たり前のように結子たちと一緒にここに来たのだ。

しかも、彼の不機嫌度が披露宴の時より更に増しているように感じられた結子は、恐る恐る聞いてみた。

「あの、係長？」

「何だ？」

「どこが具合でも悪いんですか？ 頭が痛いとか、お腹を下しているとか」
「……どういう意味だ？」

本気で不思議そうな顔をする澤井を見て、いつも以上に無愛想な理由は体調が悪いわけではないと判断した結子は慌てて言葉を取り繕った。

「いえ、ちょっと冷たい物が欲しかったので、係長もどうかかなーと思って」

そう言って持っていたグラスを呷ると、半分ほど残っていたビールが一気に喉に流れ込んだ。

「ぐふっ」

「お前なあ……」

「おお、出水さん、いい飲みっぷり。お代わりどうぞ。係長も」

咽かけた結子におしぼりを握らせ、背中を擦りながら何か言おうとした澤井を遮るように、同僚がビール瓶を手に押しかけてくる。自分のような若輩者になんでこんなに酌をする人が多いのかと思う余裕もなく、気が付けばビールやワインなどを結構飲まされていた。

「おい、いい加減にしろよ。係長も止めて下さらないと拙いですよ。みんな係長に酌をしたついでに出水にも注いでいくから、このままあなたの横にいたら、出水がベロンベロンに酔っぱらってしまっ」

咳き込んでおしぼりに顔を埋めていた結子の耳に、平岩の声が響いてきた。

「出水も、もっとうまく断れよ。この人と同じレベルで飲まされたら速攻で潰されるぞ」

そう言っただけで心配そうに覗き込む平岩は何だかお父さんみたいだ。そんなことを思った結子は自分でもそれがおかしくて笑っていた。

「大丈夫ですよお、何と言っでも今日はお祝いですから」

真面目に心配している平岩に対してへらへらと笑いながら答えているあたり、すでに酔っぱらっている証拠なのだが、お酒のせいで思考がフリーズしかけている本人にまったくその自覚はない。平岩は呆れ顔で彼女の手からまだビールの残っているグラスを取り上げると、代わりに自分が持っていたウーロン茶を押し付けた。

「とにかく、係長、もっとうまく断れよ。この人と同じレベルで飲まされたら、出水は本当に潰れますから」

彼はそう言うと、まだ隙を見て澤井達に酌をしようとして狙っていた一団を引き連れて、挨拶がてら他のテーブルへと移っていった。

また平岩さんに迷惑かけちゃったかな。

それを目で追いながら少し冷静になってウーロン茶で喉を潤した結子は、今日何度目かも分からないため息をつく。

その様子を見ていた澤井もまたどういうわけか、同じように深いため息をついたのだが、ぼんやりしていた彼女はそれには気が付かなかった。

その後も澤井の不機嫌そうな様子は変わらなかったが、それでも誰かが彼女に酒を勧めるたびに彼が代わりに断ってくれた。その分澤井がかなり飲まされていたようだが、見たところ全くと言っていいほど酔っぱらう気配はない。

「係長って、本当にお酒強いんですね」

結子が感心しながら言うと、澤井は平然とこう答えた。

「ワインならフルボトル、ウイスキーやブランデーなら一瓶くらいが限界だな。ビールは腹が痛くなるまでいける。日本酒は酔っぱらうまで飲んだことがないから分からない」

一体あなたはどこの星の住人ですか？ といわんばかりの目で自分を見る彼女に、澤井が苦笑いする。

「アルコールを分解するのが速いんだらうな。結構飲んでも二日酔いになることは滅多にないから」
アルコールに弱く、すぐに酔っぱらってしまう彼女には全くもって羨ましい話だ。

「その体質、私に少し分けてください」

冗談とも本気とも取れそうな顔をして言う結子にちらりと目をやると、澤井は鷹揚に頷いた。

「おお、欲しいだけ持って行っていいぞ」

「どうやって？」

「さあ？ それは自分で考える」

「……くっ、口移しとか？」

それを聞いた澤井は、ビールの入ったグラスを口にしたまま一瞬動きを止める。

「あん？ お前、それ本気か？」

「あ、今のは聞かなかったことに」

彼の冷やかな流し目に射抜かれた結子は、慌てて取り繕った。

「ほう、残念だな。そんなことならいくらでも、協力を惜しまんのに」

耳元で囁く澤井の、冗談とも本気ともつかない言葉に、結子の背に冷や汗が流れる。

「係長、近すぎです。みんなに見られません」

「何なら見たい奴には余興代わりに見せてやってもいいぞ、その口移しつてやつを」

そう言つて澤井は眼鏡の奥の睫毛の一本一本が分かるくらいぎりぎりまで顔を寄せてくる。唇が触れ合うまであと十センチというところまで迫った時、はっと正気に戻った結子は両手で彼の胸を

押し返した。

「かつ係長？」

彼女の表情に怒りよりも戸惑いを見た澤井は、ふんと鼻先で笑うと再び平然とグラスを傾けた。

「あの……」

「係長、グラス空きましたね？」

澤井の真意を測りかねた結子がそれを問う前に、彼はビール瓶を手にした女性社員たちに取り囲まれてしまう。

「お前はもう飲むなよ」

彼にそう言い渡され、ソファアの端に押しやられた結子は今しがた起きたことを咀嚼しきれずただ当惑していた。

もしかして、私、係長に迫られた？

酒席とはいえあんなことを真顔で言われると、冗談でも心臓に悪い。

横目でちらりと見た澤井は、何事もなかったようにクールな表情で平然と酌を受け続けている。

その様子にほっとしつつも何となく解せないものを感じたまま、結子は両手で握りしめていたウロン茶のグラスをじっと見つめていたのだった。

二次会がお開きになったのは夜の十時前だった。

途中からアルコールを控え、ジュースやウロン茶にしていた結子だが、まだ何となく体がふわ

ふわして真っ直ぐに歩くのが難しい。

幹事の呼びかけで、今日の主役の二人を店から送り出す花道を作るための列に並んだ結子だが、歩いている時はまだしも、立っているだけではどうも体がぐらぐら揺れる。

案の定ふらついたところをそばにいた澤井に助けられ、その上運悪く現場を平岩と早妃子に見つかってしまった。

「出水さん、大丈夫？」

「出水、あんまりアルコールに強くないのに、結構飲まされていたらどう？」

主役の平岩と、早妃子にまで気を使われた結子は恐縮した。

「へっ、平気です。お二人とも、おめでとうございます。あの、お幸せに」

「ありがとう、出水さん。それから澤井君も、今日は披露宴にも出席してくださいましてありがとう」

「いや」

いつの間にか自分の真後ろに来ていた澤井の声に、結子は思わずびくりとした。彼女が少し体を反らせただけで肩が触れてしまうくらい、彼がすぐ近くに立っている。先ほどのこともあってか、それを意識しただけで結子は急に胸が苦しくなった。

だから彼女は、澤井が平岩たちと話をし始めると、これ幸いとさりげなくその輪を離れ、少し端に寄って歓談する三人の様子をぼんやりと眺めていた。

気分は悪くないけれど何だか本当にふわふわする。何かとんでもないことをしでかさないうちに、今日はもうこのまま家に帰ってさっさと寝てしまった方がよいだろう。

しかし、お酒に弱いという自覚があるのに飲み過ぎで真っ直ぐ立ってもいられないなんて、社会人としての品位を疑われそうだ。

そんなことを思いながら自分の格好を見下ろせば、今日のために買ったおニューのワンピースはいつの間にか皺だらけだった。どこかに引っかけて伝線したストッキングもさっきトイレで脱いでしまったために、生足にパンプスという平素では考えられないような状況だし、その上服や髪の毛だけでなく、バッグの中までもタバコと食べ物とお酒の入り混じったような饅えた匂いが染みみついている。

体力にはまだ若干余裕があるものの、酔いと気疲れで思考が鈍っていた結子はもはや正常な判断が下せる状態ではなかったのだと思う。

そんな彼女の心を決定的にかき乱したのは、澤井が早妃子を見つめる目だった。

言いようのない、切なそうな表情を浮かべた彼を見ているだけで、結子の胸がやるせなく痛む。

どんなに彼を想っても決して振り向いてもらえない辛さ。他の人を見る視線の熱さに嫉妬してしまう自分の心の醜さ。それらから目を背けることができないう苦しさが彼女の忍耐力を容赦なく蝕んだ。だから澤井と二人きりになった時、つい衝動的にあんなことを口走ってしまったのだ。

「一晩一緒にいて下さい」
なんて。